原著論文

ル・コルビュジエの東方の旅における「屋上庭園」の起源としての「庭園」への感性

— 旅の手帖と旅行記における記述の比較 —

千代 章一郎

広島大学大学院工学研究院

Le Corbusier's Kansei (Sensibility) of 'Garden' as the Sources of 'Roof Garden' in Voyage d'Orient

— The Comparison of the Descriptions between the Sketchbook and the Book of Travel —

Shoichiro SENDAI

Graduate School, Hiroshima Univ., 1-4-1 Kagamiyama, Higashihiroshima-shi, Hiroshima 739-8527, Japan

Abstract : The purpose of this paper is to consider the Kansei (sensibility) of the architect during his journey concerning 'Garden' as the Source for 'Roof Garden (toit-jardin)' through the text analysis according to the viewpoint of Kansei-philosophy. This paper deals with Le Corbusier's journey to the east (1911). At first, we analyze Le Corbusier's descriptions extracted from *Voyage d'Orient* carnets and *Le voyage d'Orient*. We find that Le Corbusier describes various themes for 'garden' concerning 'material', 'composition' and architectural 'type'. As a result, we can say that during the transitional process from the *Carnets* to the *Voyage*, Le Corbusier describes the relationship between the body and the natural landscape.

Keywords : Architect Le Corbusier, Journey, Garden

1. はじめに

1.1 目的

本稿は、場所と身体の質的な相互関係に着目する感性哲学的視点から [1], 建築的感性を明らかにするため、近代建築家の一人であるル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) の東方への旅 (Voyage d'Orient, 1911) (図1) に着目し、その身体を通して五感を働かせた旅の中に、「屋上庭園」[注1] というル・コルビュジエの建築的構想の起源としての「庭園」に対する感性を考察することを目的としている。

ル・コルビュジエが近代建築家としての活動以前に敢行したこの旅の身体体験は、後に柱とスラブによる骨組み「ドミノ」(Dom-ino, 1914) に基づいて提唱された「近代建築の5つの要点」(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1926) と密接に関連する [注2]。実際、ル・コルビュジエの建築制作における「壁」や「屋根」の概念は、東方への旅においてすでに見出せるものである [2, 3]。

しかし、ル・コルビュジエの「屋上庭園」が東方の旅に着想を得ていると推測できるにもかかわらず、ル・コルビュジエ自身は直接的な出自に関して言及していない [注3]。実際、建築物の形式としてはル・コルビュジエの「屋上庭園」はモダニズムの言語であり、東方への旅の歴史的環境に屋上

庭園という形式が存在していたとは考え難く、「屋上庭園」に関する直接的な記述もない。

そこで本稿では、仮説的に広義の「庭園」すなわち敷地内の半自然的環境である庭園や外部の自然的環境と接する半屋外空間に着目する。

図1 「東方への旅」の旅程

1.2 研究の方法

「東方への旅」に関する分析の一次資料として、旅の現場で建築的な環境や自己自身と直接的に向き合って即時記録された『ル・コルビュジエの手帖 東方への旅 (Voyage d’Orient carnets)』[4] (Carnetsと表記) [注4]、および読者を想定し旅の体験を対象化した旅行記である『東方への旅 (Le voyage d’Orient)』[5] (Voyageと表記) [注5] の記述を用いる [注6]。

これらの資料から「庭園」を説明対象とした記述を抽出し、記述の内容をKJ法によってそれぞれに整理することで、主題を抽出する。

加えて、抽出された主題に対して建築家の感性がどのように働いていたのかを考察するため、建築家ル・コルビュジエの「東方への旅」における「壁」及び「屋根」の建築的感性に関する既往研究 [15, 16] と同様の手法を用いて、CarnetsとVoyageそれぞれの「庭園」に関する主題を、客観的に捉えた事物的記述と、ル・コルビュジエ自身の心象を付加し「庭園」を主観的に捉えた現象的記述に大別し、比較検討を行う (表1)。

1.3 研究の位置付け

ル・コルビュジエの「東方への旅」やイタリア等その他の旅に着目し、手帖の素描や記述を分析した研究の代表的なものとしては、旅の体験がル・コルビュジエの後の建築設計に与えた理念的影響や、旅において見出された歴史的建築物の建築制作への参照システムの分析がある [6-9]。また、旅の旅程や記録の実証的研究を通して、ル・コルビュジエの自己形成に関する分析がある [10-13]。これらの既往研究は、ル・コルビュジエの旅を通しての自己形成と理念形成の包括的な論証であり、いわばル・コルビュジエの知性の形成に関する考察である。これらの既往研究に対して本研究は、知性以前の建築家の身体的な旅における感性を主題化し、その方法論としてCarnetsとVoyageの差異に着目している。

一方、ル・コルビュジエの屋上庭園に関する研究もあるが [6, 14]、特定作品の屋上庭園に関する考察や機能論的な分析が主であり、旅との関連性が主題化されていない。

表1 「東方への旅」の記述分類表 (抜粋) (但し、ゴシック太文字記述は現象的記述を示す)

対象	Carnets (総記述数12)	主題			Voyage (総記述数18)	主題		
		素	構	形		素	構	形
		材	成	式		材	成	式
ブラハ／民家	たいへん洗練された中庭の写真を撮った。この中庭は、カールスルーエやリューベックで覚え書きをとった、非常に優れた原則を反復したものにすぎないが、最初の中庭には1本の樹木と、対角線方向の通路がある。aには庭園があり、bの周囲の建物は、cのものより低い。	○	○	○				
ウィーン／宮殿					樹々の緑に包まれたウィーン郊外、拱門（アーケード）の設けられている低い館に囲まれて、広大な中庭がひろがる。＜中略＞予想もしなかったフランス式庭園の光景が眼前にひろがる。それにしても驚くべき庭園。貧しいとさえ思えるほどの単純さ！否、ちがう。途方もない大きさ！正方形に見える花壇は驚くほど広く、奥行きがあり、まったく平坦で、簡潔に締められたパースペクティブのように幾何学的に区分され、ひめつげの緑取りがなされている。		○	○
タバン／民家					その丘陵の城壁からほど遠くない所に何軒かの古い荒屋が、あたかもアカシアの樹々の間に開いた花のように建っている。簡素な住居。それらは塙でつながり、中から樹々の繁りがのぞいている、この起伏ある土地に生まれるべくして生まれたものだ。		○	○
チノルボ／民家	庭の扉は、緑色とバラ色の木でできていて、囲いの中は、ぶどう棚で覆われている。バラとぶどう棚、百合とカーネーション。	○			囲まれた部屋よりは小さく、葡萄棚ですっかり覆われ、バラ色や緑に塗られた門がついている。薔薇とチューリップ、それに不実な香りを放つたくさんの百合とせききく、そしてヒヤシンス。それでいて白い石畳の敷かれている一角には少しの花も侵入していない。	○		
ブルガリア／民家、墓地	ただ岩石の細長い破片を、地面に投げ出して並べただけだ。あざみの一種の大きな植物が、その黄色い主張色を引き立てている。		○		墓地の小さな中庭には大理石の噴水から水が流れ、よく実った大きな葡萄棚の下のにぎりこまれたひめつげの花壇の緑と、白い砂の小径との間には一面花で覆われていた。壁は白く輝いている。ときには群青色の石灰でめられていることもあった。墓地はその町を平野と結びつけ、夢想への入口となっている。墓石はメーンヒルのようにあざみの藪の上に林立している。表面にはたくさんの小さな文字が刻まれていた。そこには統一も秩序もなく、大きさもまちまちで、碑名も銘文も紋章もない。地面に突きささった岩の破片なのだ。栽培されている丈の高い植物が、この広大な大地の上で垂直に伸びる力を印象づけている。その花はレモン色で、ざらついた石の濃い灰色とあざみの乾いた青に対して独特な色合いをなしている。		○	○
ブルサ／民家	ブルサで見たトルコ風の家々は、カザンリクやバヤの中庭を思い出させる。その原則は明らかだ。それは、建築術による、花に埋れた囲。ぶどう棚がその一部を覆っている。右手には窓、左手には壁という幾何学。そして上方に夥しいほどの背の高い花。奥には、壁にいくつかのニッチがある。	○	○	○				
ブルサ／モスク	モスクの上部にあるテラス、大木、木製の棚、花がいっぱい、商店、民家、ふたつの噴水、ぶどう棚。そのなかには、桑、いちぢく、ぶどう棚。ブルサにて、庭園と街路面。	○		○				
ブルサ／城壁	ブルサの城壁の上の庭園には、ふたつの噴水のある階段がある。			○				
スタンブール／モスク					スタンブールの丘のそれぞれの頂きには、＜偉大なるモスク＞が純白に輝きながら大きくふくらみ、明るい墓地の中の綺麗な墓石に囲まれた広々とした前庭に向かって、その威容を誇っている。＜中略＞前庭の大きな壁の外側は刻まれた石が厳格なプリズムを形成しており、三つの入口は鍾乳石状装飾の下に開いている。プリズムは脚部となり、モスクと一体となって、夜になるとスタンブールの鳥冠部に巨大なスフィンクスを浮かびあがらせる。		○	○
スタンブール／宮殿					前庭では素晴らしく美しいファヤーンズが、このもう一つの安息の地の入口を華麗に彩り、そこには数多くの霊廟と聖なる墓碑がある。			○
スタンブール／民家、墓地					スタンブールは墓石に埋もれている。人々はそれを愛している。それは住居の中庭にまであるのだ。＜中略＞コンスタンチノープルは荒涼たる地である。人々は住居を建て、樹木を植え、そして残った場所には死者を埋葬する。墓石は街路に侵出し、葉の繁みの下に身を据え、スルターンのおもむきのあるモスクのまわりの限られた囲いの中でひしめきあっている。――そして青あざみがこの地に花開く。＜中略＞トルコ人の生活はモスクから墓地へと流れる。人々が黙々と煙草をふかしているカフェを通して。小綺麗なカフェはモスクの前庭の際にまで並び、何某かの聖人の墓を自分の中庭の金網で囲んだ塚の上に巧妙にとりこんでいる。		○	○
カリエ／宿屋					広間を通り抜けて高いところにかかっているテラスに出ると、金色に輝く海を重々しく背に負いながら、青い葡萄にすっかり覆われた木製の葡萄棚の力強い建築に囲まれていることに気がついた・・・。	○	○	○

2. 主題の抽出

対象とした一次資料から「庭園」に関する記述を抽出し[注7]、記述の内容をKJ法によってそれぞれに整理する(図2,3)[注8]。

なお、本研究では、建築歴史意匠の研究者3名によってKJ法を行い、要素的な類似性による記述の分類を行った。その際、それぞれによる判断が異なる場合には、判断根拠と判断の是非を議論し、判断の一致が得られた時点で再度始めからKJ法による分析を試み、全ての記述について判断が一致するまでこの行程を繰り返すという方法をとった。

その結果、「東方への旅」におけるル・コルビュジエの「庭園」に関する記述は、*Carnets*と*Voyage*ともに、庭園の植栽や材料などに着目した「素材」、その素材要素が庭園においてどのように構成されているかに着目した「構成」、さらには、庭園の構成が建築的に組み込まれた際の位置関係である「形式」の3つの主題としてまとめることができた[注9]。

図2 KJ法による*Carnets*の図解

図3 KJ法による*Voyage*の図解

3. 主題の分析

以下、抽出した「素材」「構成」「形式」という3つの主題に関して、典型的な記述を抜粋する。

3.1 *Carnets*における「庭園」に関する記述

3.1.1 素材

「素材」に関する記述や素描は6つあり、民家の庭園を主に旅を通して確認できる。

典型的な記述としては、チノルボ(tarnovo)[注10]の民家を訪れた際に書かれた「囲いの中は、ぶどう棚で覆われてい

る。バラとぶどう棚、百合とカーネーション」[注11]や、カザンリク(Kasanlik)[注12]の墓地に関する記述である「ただ岩石の細長い破片を、地面に投げ出して並べただけだ。あざみの一種の大きな植物が、その黄色い主張色を引き立てている」[注13]がある(図4)。

このように、例外的な記述はあるものの、全体としては多種の花々や植栽、そして石板などの自然素材を詳細に渡って事物的に記述している。

3.1.2 構成

「構成」を説明対象とした記述は7つあり、民家を主に旅を通して確認できる。

典型的な記述としては、プラハの庭園を訪れた際に記された「非常に優れた原則を反復したものにすぎないが、最初の中庭には1本の樹木と、対角線方向の通路がある。aには庭園があり、bの周囲の建物は、cのものより低い」[注14]があり、矩形の庭園と通路の数学的な構成配置を分析している(図5)。

このように、ル・コルビュジエは幾何学的な構成配置に強く関心を寄せ、詳細に渡って事物的に記述している[注15]。

3.1.3 形式

「形式」を説明対象とした記述は旅を通して確認でき、民家や僧院など様々な建築を対象としている。また、記述数は12あり、「素材」や「構成」に対して多く確認できる。

図4 ブルサの民家の庭園で見た植栽

図5 プラハの民家

その中で、プラハ（Prague）の民家に関して「たいへん洗練された中庭の写真を撮った」[注16]と記述しているように、民家の「中庭（cour）」に強く着眼を置いた事物的記述が旅を通して確認できる（記述数9）（図6）。

また、旅の中盤であるトルコ以降になると、ブルサのモスクに関して「モスクの上部にあるテラス、大木、木製の柵、花がいっぱい、商店、民家、ふたつの噴水、ぶどう棚、そのなかには、桑、いちぢく、ぶどう棚、ブルサにて、庭園と街路面」[注17]と記しているように、カフェや僧院の「テラス（Terrasse）」に着目した事物的な記述が確認できるようになる（図7）（記述数2）。

さらに、ブルサ（Bursa）以降では「ブルサの城砦の上の庭園には、ふたつの噴水のある階段がある」[注18]と記しているように、モスクや神殿におけるシンメトリカルな「前庭（jardin, parvis）」に着目した事物的な記述が確認できるようになる（記述数2）。

以上のように、ル・コルビュジエは東方への旅で訪れた、中庭、テラス、前庭という一般的な庭園の形式を事物的に記述している [注19]。

図6 コンスタンチノーブルで訪れた民家の中庭

図7 ロドストで見たカフェのテラス

3.2 Voyageにおける「庭園」に関する記述

3.2.1 素材

「素材」を説明対象とした記述は9つある。それらは、民家を主に旅を通して確認でき、トルコの地でより顕著に確認できる。

典型的な記述としては、カザンリク（Kasanlik）のバラ谷（La Vallée des Roses）に関する記述である「墓地の小さな中庭には大理石の噴水から水が流れ、よく実った大きな葡萄棚の下刈りこまれたひめつげの花壇の緑と、白い砂の小径との間は一面花で覆われていた。＜中略＞栽培されている丈の高い植物が、この広大な大地の上で垂直に伸びる力を印象づけている。その花はレモン色で、ざらついた石の濃い灰色とあざみの乾いた青に対して独特な色合いをなしている」[注20]がある。

このように、ル・コルビュジエは多種の植栽や自然素材に関して事物的に示している。

3.2.2 構成

「構成」に関する記述は13あり、旅を通して宮殿や僧院、民などの多様な建築を対象に確認できる。

ウィーンのシェーンブルン（Le Schoenbrunn）やベルヴェーレ（Le Belvédère）の庭園に関する記述である「貧しいとさえ思えるほどの単純さ！否、ちがう。途方もない大きさ！正方形に見える花壇は驚くほど広く、奥行きがあり、まったく平坦で、簡潔に締められたパースペクティブのように幾何学的に区分され、ひめつげの縁取りがなされている」[注21]に典型が見られるように、ル・コルビュジエは旅を通して宮殿や僧院のフランス式幾何学庭園に大きな関心を抱き、幾何学で構成された庭園の空間体験の印象を現象的記述によって記録している。

一方、カザンリクのバラ谷（La Vallée des Roses）で散見した中庭に関する「メンヒルのようにあざみの藪の上に林立している。表面にはたくさんの小さな文字が刻まれていた。そこには統一も秩序もなく、大きさもまちまちで、碑名も銘文も紋章もない。地面に突きささった岩の破片なのだ。栽培されている丈の高い植物が、この広大な大地の上で垂直に伸びる力を印象づけている」[注22]や、スタンプールの民家の中庭に関する「トルコ人の生活はモスクから墓地へと流れる。人々が黙々と煙草をふかしているカフェを通過。小綺麗なカフェはモスクの前庭の際にまで並び、何某かの聖人の墓を自分の中庭の金網で囲んだ塚の上に巧妙にとりこんでいる」[注23]という記述に典型が認められるように、旅を通して民家の庭園における風習や習慣、文明を詳細に分析することで、自然景観を取り入れた非幾何学的庭園に関する現象的記述を残している（記述数6）。

そしてこれらの記述は、タバンの民家に関して「簡素な住居。それらは塀でつながり、中から樹々の繁りがのぞいている、この起伏ある土地に生まれるべくして生まれたものだ」[注24]と述べられているように、その土地固有の環境や景観と庭園の関係性を示している。

このように、ル・コルビュジエは「構成」において幾何学的庭園と非幾何学的庭園の両方を現象的な記述を用いて記述している。

3.2.3 形式

「形式」を説明対象とした記述は18あり、旅を通して宮殿や民家、アトリエなど様々な建築を対象とした記述が確認できる。

まず旅の序盤から、ウィーン郊外にあるシェーンブルン宮殿（Le Schoenbrunn）に関して「樹々の緑に包まれたウィーン郊外、拱門の設けられている低い館に囲まれて、広大な中庭がひろがる」[注25]と記しているように、ル・コルビュジエは宮殿や民家、アトリエを対象として、建物や塀で囲まれた「中庭（cour）」に着目した事物的な記述を多く残している（記述数9）。

また、旅の中盤であるトルコ以降になると、カリエ（Karié）の宿屋に関する「広間を通り抜けて高いところにかかっているテラスに出ると、金色に輝く海を重々しく背に負いながら、青い葡萄にすっかり覆われた木製の葡萄棚の力強い建築に囲まれていることに気がついた・・・」[注26]の記述に典型が見られるように、外部に突き出した「テラス（Terrasse）」にも着目し（記述数3）、テラスによって建築と景観に調和がもたらされる効果を現象的記述によって示している。

一方、スタンブールのトプ・カプ宮殿を訪れた際に「前庭では素晴らしく美しいファヤーンズが、このもう一つの安息の地の入口を華麗に彩り、そこには数多くの霊廟と聖なる墓碑がある」[注27]と記しているように、旅を通して建築の前面に設けられた「前庭（jardin, parvis）」に着目した事物的な記述が確認できる（記述数10）。

このように、宮殿や民家、アトリエなど様々な場所を対象として、訪れた中庭、テラス、前庭という一般的な庭園の形式を現象的、事物的両方の記述によって記述している。

4. 結果（表2）

ル・コルビュジエが*Carnets*（記述数12）に示したものは、いずれも事物的な記述による簡素な記録であり、「素材」「構成」「形式」という3種類の主題が抽出できる。

「素材」では多種の植栽に加え自然素材に着目した記録も

残し、「構成」に関しては主に矩形の庭園に着目して通路や植栽との関わり方に普遍的な構成原理を見いだしている。さらに、「形式」においては、中庭、テラス、前庭という一般的な庭園の形式を詳細に記述することで、周辺環境との関係性に関する記述よりむしろ、庭園を構成する諸要素に焦点を置いた記述をしている。

一方、*Voyage*では事物的な記述（記述数6）に加え現象的な記述も用いられ（記述数12）、庭園に関する主題として「素材」「構成」「形式」という*Carnets*と同様の3種類が抽出できる。

「素材」では庭園の樹木や花を詳細に記しているのに加え、石板などの自然素材に着目し、周辺環境と「素材」の関係性についても詳しく記述している。また「構成」に関しては、幾何学式庭園に関する記述に加え、その土地固有の景観を庭園に取り入れた非幾何学式庭園とも言える庭園に関する記述が確認できる。さらに、「形式」では、*Carnets*同様に中庭、テラス、前庭という一般的な庭園の形式に関する記述が認められ、ル・コルビュジエが見渡したその土地独自の景観や、建築と周辺環境との関係性を現象的な記述を主に用いて記述している。

以上から、*Carnets*と*Voyage*との記述内容の差異は「構成」における「非幾何学的庭園」として確認できる。また、すべての主題が事物的記述によって書かれている*Carnets*に対し、*Voyage*では「構成」と「形式」において現象的な記述が用いられている。

5. 考察

この*Carnets*から*Voyage*への記述の変容は、むしろ出版形態としての素描の有無や、対象読者の有無という外在的な要因と無関係ではないであろう。しかし、それは根本的には旅の現場で即時記録的に書かれた*Carnets*と、旅の後に机上で推敲された*Voyage*との内在的思考形態の差と考えられる。

もちろん、ル・コルビュジエは*Carnets*に「庭園」を記録する際、即時的に言語化できるような幾何学的特徴のみに関心があったわけではないであろう。旅の現場で言表し得ない非幾何学的庭園の環境の特徴や景観との関係性については、素描を書くことで記録を残し、旅の後で書籍としてまとめる際に、そうした素描に含意された感性的なものを現象的記述によって文章化していたと推測される[注28]。

実際、旅の現場で書かれた*Carnets*においては「庭園」を素描や事物的記述によって記録している一方、素描がなく記述のみによって著された*Voyage*では、*Carnets*には見られない現象的記述も多く用いられ、その中で土地固有の景観に着眼を置いた記述を行っている。

6. 結論

この事物的記述から現象的記述への変容は「東方への旅」における「壁」に関する感性の変容に類似している[15]。

表2 *Carnets*と*Voyage*の記述の比較

	<i>Carnets</i>	<i>Voyage</i>
素材	自然素材、植栽 （事物的記述）	自然素材、植栽 （事物的記述）
構成	幾何学的庭園 （事物的記述）	幾何学的庭園、非幾何学的庭園 （現象的記述）
形式	中庭、テラス、前庭 （事物的記述）	中庭、テラス、前庭 （事物的記述、現象的記述）

現象的な記述から事物的記述へと変化する「屋根」と比べ[16],「壁」や「庭園」は実際に触れることが可能であり,直接的な触知によってその物質性を確かめるという体験がまず事物的な記述によって *Carnets* に記録される。非幾何学的庭園のように,明快な構成をもたないものについて感じたことを言語で表現することは難しい。しかし,その触知的,身体的体験の全体は,景観と関わりつつ,現象的記述として *Voyage* に再録されると考えられる。そのような場所の唯一性を捉える感性こそが,(建築作品が不可避に一回的であるという意味で)建築的と言う事も出来よう。

こうして捉えた庭園の唯一性は,景観への眼差しに顕著となり,後の建築的製作における「屋上庭園」という主題に繋がっていくと思われる。

図版出典

表1: 筆者作成

表2: 筆者作成

図1: 筆者作成

図2: 筆者作成

図3: 筆者作成

図4: Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient carnets*, Electa architecture, Fondation Le Corbusier., 1987, vol.3, p.6.

図5: *Ibid.*, vol.1, p.37.

図6: *Ibid.*, vol.2, pp.68-69.

図7: *Ibid.*, vol.2, p.57.

注

[注1] ただし,近代建築における「屋上庭園」の形式は必ずしもル・コルビュジェ自身が考案した手法という訳ではない。実際,ル・コルビュジェが東方への旅以前に勤めていたオーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) の事務所 (Franklin apartment building, 1903) には,すでに屋上階に庭園が配され,またフランソワ・アンヌビク (François Hennebique, 1842-1921) が1903年に建設した自邸 (Maison Hennebique) にも,鉄筋コンクリート片持ち梁の上部に屋上庭園が施工されている。

[注2] 約6ヶ月間の東方への旅の素描は,後に *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vols.8* の第1巻冒頭に掲載され,ル・コルビュジェはこの旅が建築的構想の源泉となっていることを示唆している。

[注3] 「屋上庭園」の出自に関して,「エマの僧院から示唆を得て,建築をめざしてや新建築の五原則を通じて次第に明確となる」(Giuliano Gresleri: in *Voyage d'Orient carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret, 中村貴志・松政貞治訳:『ル・コルビュジェの手帖 東方への旅』,同朋舎出版,1989, p.67)),あるいは「地中海地方の最もすぐれた伝統に根ざすものであった」という指摘があるが(Peter Blake: *The*

Master Builders, USA, 1976, p.73),必ずしも実証的に検討されたものではない。

[注4] *Carnets* と *Voyage* を比較分析するため, *Voyage* で説明対象とされている1911年5月8日から10月10日の期間に関する *Carnets* の記述 (Le Corbusier: *Voyage d'Orient carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, vol.1, p.37から *Ibid.*, vol.4, p.70) を研究対象として扱う。

[注5] ル・コルビュジェは,断片的に「東方への旅」の内容を書き綴ったものを旅先からラ・ショー＝ド＝フォンに送り,『ラ・ショー＝ド＝フォン通信』に掲載している。そして旅の後に,自らの旅の手帖と『ラ・ショー＝ド＝フォン通信』を参照しながら,一冊の旅行記としてまとめた。この *Le Voyage d'Orient* と題される旅行記は当初1914年に出版される予定であったが,第1次世界大戦により企画中止となり,さらに旅で携えた *Carnets* は,第二次世界大戦の前後に行方不明となる。その後原稿自体も放置されていたが,ル・コルビュジェは死の数週間前の1965年に再びその原稿の出版を決意する。しかし手元に *Carnets* はなく,50年以上前の草稿のみを推敲し,死後1966年に言わば確定稿として記述のみで出版された。ただし,1965年にどの程度原稿に修正を加えたかは不明である。

[注6] ル・コルビュジェは旅にカメラを携帯し,数多くの写真資料を残しているが,本研究では *Carnets* と *Voyage* の分析を中心に行なっているため,本稿では研究資料として写真を使用していない。なお, *Carnets* における素描を補足的に参照している。

[注7] 説明対象に対する単文もしくは復文の総体を記述数1とする。

[注8] 本稿のように,意図や目的が確定していない記述から意味内容を汲み取ることで,ル・コルビュジェの感性の分析を行うことを目的とした研究においては,意味内容の具体性を保持しつつ最終的にひとつの枠組みへと収斂させるKJ法を用いた(参考文献[17])。なお,既往研究である「壁」(参考文献[2])や「屋根」(参考文献[3])における分類項目には,本稿に関連しない主題として色彩や装飾,形態,光がある。しかし,「庭園」における色彩や装飾は,素材である植栽を説明対象とし,また,形態は「庭園」における構成を意味している。また,光に関して庭園を説明対象とした記述は確認できないため,分類項目として記載が無い。

[注9] 抽出した記述内容は多岐に渡っているため,1つの記述に対して複数の重複する主題が確認できる(表1)。そのため,本文中に示した記述数の和は総数と必ずしも一致しない。

[注10] 現在のヴェリコ・タルノヴォ (Veliko Turnovo) であり,ブルガリア北東部の町。ルセ (Ruse) とスタラ・ザゴラ (Stara Zagora) の間に位置する。

[注11] Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient carnets*, op.cit., vol.2, p.34, (中村貴志・松政貞治訳: p.108)

[注12] 現在のカザンラク (Kazanlak)。ブルガリア・スタラ・ザ

グラ州 (Bulgaria, Stara Zagora) にあり、バルカン山脈麓のカザンラク平原に開けた都市である。

[注13] *Ibid.*, vol.2, pp.44-45, (中村貴志・松政貞治訳：p.117)

[注14] *Ibid.*, vol.1, pp.37, (中村貴志・松政貞治訳：p.55)

[注15] 例外として、ル・コルビュジエはイギリス風の庭園 (jardin à l'anglaise) の構成に着眼を置いた記述も残している。カザンラクのバラ谷 (La Vallée des Roses) については「ここからは墓地が広がり、この町を平野に結びつけて、夢想への扉となっている。というのも、僕らが初めて見たこの広大なトルコの墓地は、実に壮麗なものだから。墓石があたかもメンヒルのように林立しているが、それは実際ごく小さなものだ。それは、様式も彫り込みもなく、不揃いだ；戒名も墓誌銘もなく、象徴が一切見られない」 (*Ibid.*, vol.2, pp.44-45, (中村貴志・松政貞治訳：p.117)) と述べ、空間体験の印象を精緻に記録している。

[注16] *Ibid.*, vol.1, p.37, (中村貴志・松政貞治訳：p.55)

[注17] *Ibid.*, vol.3, p.13, (中村貴志・松政貞治訳：p.164)

[注18] *Ibid.*, vol.3, p.9, (中村貴志・松政貞治訳：p.163)

[注19] 記述は確認できないが庭園に近似する主題として、コンスタンチノーブル以降になると、神殿の柱列で形成される「廻廊 (portique)」に着目した多くの素描も残し、「廻廊」を通して見渡せる景観を精緻に描いている。

[注20] Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, 1966, p.59 (Le Corbusier, 石井勉訳：東方への旅, 鹿島出版会, 1979, p.81)

[注21] *Ibid.*, p.25, (石井勉訳：pp.33-34)

[注22] *Ibid.*, p.59 (石井勉訳：p.81)

[注23] *Ibid.*, p.84 (石井勉訳：pp.122-123)

[注24] *Ibid.*, p.36, (石井勉訳：pp.48-49)

[注25] *Ibid.*, p.25 (石井勉訳：pp.33-34)

[注26] *Ibid.*, pp.129-130, (石井勉訳：pp.189-191)

[注27] *Ibid.*, p.86, (石井勉訳：p.126)

[注28] 一例として、スタンブールのトプ・カプ宮殿を訪れた際、ル・コルビュジエは *Carnets* に素描を残してはいるが (Le Corbusier: *Voyage d'Orient carnets*, op.cit., vol.3, p.7), 庭園に関する記述は確認できない。一方、*Voyage* ではトプ・カプ宮殿に関して「前庭では素晴らしく美しいファヤーンズが、このもう一つの安息の地の入口を華麗に彩り、そこには数多くの霊廟と聖なる墓碑がある」 (Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, op.cit., p.86, (石井勉訳：p.126)) と前庭に関する記述を残している。

2010, pp.341-352.

[3] 千代章一郎, 塚野路哉: ル・コルビュジエの「屋根」への感性－近代建築家の旅が建築構想へ与えた影響－, 日本感性工学会論文誌, Vol.10 No.2, 2011, pp.177-183.

[4] Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret), 中村貴志・松政貞治訳:『ル・コルビュジエの手帖 東方への旅』, 同朋舎出版, 1989).

[5] Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, 1966, (Le Corbusier, 石井勉訳:『東方への旅』, 鹿島出版会, 1979).

[6] Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968 (Stanislaus von Moos, 住野天平訳:『ル・コルビュジエの生涯 建築とその神話』, 彰国社, 1981).

[7] William J. R. Curtis, 中村研一訳:『ル・コルビュジエ—理念と形態』, 鹿島出版会, 1992.

[8] 松政貞治:『ル・コルビュジエの手帖—東方への旅』を読みとく, ル・コルビュジエ 建築・家具・人間・旅の全記録, エクスナレッジ, pp.128-139, 2002.

[9] 加藤道夫:『ル・コルビュジエ 建築図が語る空間と時間』丸善出版, 2011.

[10] Stanislaus von Moos, Paul Glassman ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier*, Yale University Press, New York, 2002.

[11] Philippe Duboy: *Voyager avec Le Corbusier croquis de voyages et études*, La Quinzaine Littéraire, 2009.

[12] Gresleri Giuliano: *Le Corbusier, Viaggio in Oriente*, Venezia, 1984 および 1985.

[13] Geoffrey H. Baker: *Le Corbusier, The Creative Search*, E&FN SPON, New York, 1996.

[14] Jacques Lucan éd.: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, (Jacques Lucan ed., 加藤邦男監訳:『ル・コルビュジエ辞典』, 中央公論美術出版, 2007).

[15] 千代章一郎, 萩野亮: ル・コルビュジエの東方への旅における「壁」への感性, 第11回日本感性工学会大会予稿集 2009, 1B1-2_J11-090519-7.pdf

[16] 千代章一郎, 塚野路哉: ル・コルビュジエの東方への旅における「屋根」への感性－『手帖』と『旅』の記述の比較－, 日本感性工学会論文誌, Vol.10, No.2, pp.169-176.

[17] 川喜田二郎:『発想法』, 中公新書, 1967.

参 考 文 献

[1] 桑子敏雄: 感性の哲学, 日本放送出版会, 2001.

[2] Shoichiro Sendai and Ryo Hagino, 'Le Corbusier's Kansei of 'Wall' -The Journey and the Architectural Concept by the Modern Architect-', The Proceedings of the Kansei Engineering and Emotion Research International Conference

千代 章一郎 (正会員)

1998年 京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了。京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻助手を経て、現在広島大学大学院工学研究院社会環境空間部門准教授。建築歴史・意匠学の視点から、こども環境、建築景観、都市空間を通して感性哲学研究に従事。